

出来ても居ない様でございます。何とかして出来ないものかしらと考へて居りましたところ、先日

フレイベル館で兎、猿、熊、犬等を拵へました、外國製のそれに比して廉價であるとは云へ、併しいつのお芝居にも不自由しない程の數と種類（まだ四五種位ですのぞ）とを揃へておくことは一寸六ヶ敷うございます。やはり布とか畫用紙とか厚紙などに欲しいと思ふ動物の特徴を現し、之を工夫して立體にし、着物をさせて使へる様にするのが一番私共として容易く出来る事だと思ひます。

若し立體にするのになか／＼骨が折れて困る時には畫用紙などにそれを切抜き、持つ所をつけて用ひても、つまりはよろしいと思ひます。

こんな風にして極く簡單に致して居ります芝居の中、花咲爺について次に徳久さん白根さんが書いて下さいました。花咲爺はおはなし全部を致さ

ずに、灰をまいて枯木に花を咲かせる場面だけを行いました。

## 花 咲 爺

徳 久 孝子  
白 根 美 智子

### 第一幕

場 面 田舎の街道

背 景 遠景に農家、樹等を描き、のんびりとした田舎の街道の景色。舞臺に枯

木を一本用意する

登場人物 善兵衛 なるべく優しい顔のお爺さん

ん 悪兵衛 少し怖い顔のお爺さん

殿様 及び 馬

家來

其の他 枯木、ボール紙を切り抜いて作つて

も又實物でもよい

花の咲いた木 前の枯木と同じ物に

花をつけて置く

笹

舞臺の幕が開くと笹を持つた善いお爺さんが

少ししよげながら出て来る。

善 「わしの大事な白犬も、隣の悪兵衛さんに殺されてしまつたし、又其のお墓に生えた木で作つたあの白も、焼かれてしまつて、今はとうとう此の灰だけになつてしまつた。あゝあゝ情無い事じゃなう。」

と少し悲しがつて居る。が、又元氣を出して、

善 「でも此の灰は、本當に不思議な灰ぢや。これのこぼれた所は、どの草も皆花が咲き初めた。今迄しほれて居た草は、急に生き／＼して來た。誠に誠に不思議な灰ぢやなう。あゝ、あそこに

あんな枯れ木がある。あれにも此の灰を撒いたら、花が咲くかも知れない。そうしたら皆の衆が、どんなにか驚く事じゃらうな。」

と言つて居ると、御殿様の御通りと見えて、遠くの方から、

家 「下におらう下におらう。」「下におらう下におらう。」

善兵衛さんはびつくりして、

善 「おや。殿様の御通りと見える。これは大變。

御無禮の無い様に、此の邊に坐つてお迎へ致しますせう。」

と急いで舞臺の隅の方に行つて坐る。そして急に思ひ付いたやうに、手を打つて喜びながら、

善 「あゝ、そうぢや。そうぢや。御殿様に此の灰で枯木に花を咲かせて御覽に入れたら、嘸かし御満足遊ばす事ぢやらう。うん。それがよい。それがよい。幸ひ未だ灰も残つて居る。あゝ、

もうあそこにお見えになつた。へエ、へエ、へエ、と平伏して居る。其の時殿様馬に乗り、家來が手綱を取つて静々と進んで来る。

家「下におらう。下におらう。これく皆御無禮あつてはならぬぞ。」

と言ひつゝ段々行き過ぎやうとする。爺はあわてて、

善「えーあの一寸も願がござります。」

と家來の前に進み出て丁寧な御辭儀をする。

家「なに。願があるとな。一體そちは何者ぢや。」

善「私は此の村に居ります花咲爺と申す者で御座います。大層花を咲かせる事が上手で、どの様な枯木にも忽ちバツと花を咲かす事が出来ます。それで、一つ殿様の御目かけ度い存じまして、先程からこれに御待ち申上げて居りました。」

家「枯木に花を咲かすと、ハ、ハ、ハ、ハ、爺、そ

れは本當の事か。偽りを申してはならぬぞ。」

善「これはこれは恐れ入ります。此の爺は、生れてから、たゞの一度も嘘は申した事が御座いません。」

家「左様か。しからば暫らく此處に控へ居れ。余が今殿様に御伺ひ申上げるに依つて、御許しあらば、早速御覺に入れるがよからう。」

善「ハハッ 有難き仕合せに存じます。」

と言つて平伏して居る間に家來は殿様の前に出て、うや／＼しくお辭儀をして、

家「申し上げます。申し上げます。」

殿「何ぢや、何用ぢや。」

家「ハッ 唯今こゝに控へ居ります爺、名を花咲爺と申し、枯木に花を咲かせる事が、非常に上手との事でございます。それで是非御殿様の御覧に入れ度く、先刻から御通りを待ち申上げて居りました由、申して居りますが、如何取は

からひまするか。」

殿様はもうようになづきながら、

殿「なに。花咲爺が枯木に花を咲かすと申すか。

これは又面白い。苦しうない。早速咲かせて見よと申せ。」

家「ハハッ かしこまりました。」

又禮をして爺の所に來る。

家「これく爺、御殿様は早速御許し下されたに依つて、これなる枯木に花を咲かせて見よ。」

爺「早速に御聞届け下さいまして、誠に誠に有難う御座います。では咲かせて見ませう。」

と言ひつゝ立上り、

ちりん ぼりん

黄金さらさら ブーツ

ちりん ぼりん

こがねさらさら ブーツ

と持つた笊から灰を撒く。此の間に手早く枯木と、

花の咲いた木とを取換へる。殿様はいと満足氣に

殿「あゝ、見事見事、天晴れな奴ぢや。御蔭で思ひがけない花見が出來た。これく此の爺に澤

山の寶美を取らせよ。あゝ、見事見事。」  
と花に見とれてゐる。

殿「ハハッ」

と爺の所に行き、

家「これく爺、御殿様は大層御満足で、お前に澤山御寶美を下さるそうぢやから、わしについで來なさい。」

爺「ありがたうございます、有難うございます。」  
とにこにこおじぎをしながらついで行く。

——幕——

## 第二幕

場面背景は一幕の時に同じ。

今の花の咲いた木の側へもう一本枯

木を立てて置く

片方から善兵衛、片方から悪兵衛が出て来る。

悪「善兵衛どん 善兵衛どん 何だか馬鹿に嬉し相な顔をして、何かいゝ事でも有りましたか。」

善「ちや／＼誰かと思つたら、悪兵衛さんですかえ。まあ／＼聞いて下され。こんな目出度い事があるのですぞえ。わしがな昨日お前様の所から頂いた竈の灰は、あれは本當に本思議な灰であれのかゝつた物は、みんな奇麗に花が咲くのぢや。それで、さつき御殿様が御通りの時、枯木に花を咲かせてお目にかけてたら、殊の外のお喜びで、山のように御寶美を下されたのぢや。こんな嬉しい事は、生れて始めてですよ。」

悪「それは／＼よい事をしなされたな。して又、どの様にして其の灰を撒きなされたのぢやね。」

善「何。何でもない事なのですよ。たゞ、

ちりんぼりん 黄金さらさら プーッ

ちりんぼりん 黄金さらさら プーッ

とかう撒いただけですよ。

悪「あゝ、そうですか。そんなに易い事なのかえ。どれ、わしも一つやつて見ませう。

ちりんぼりん 黄金さらさら プーッ

これでいゝのですか。」

善「あゝ、そうです。そうです。そう言ひながら灰を撒くと、奇麗に花が咲きますのぢや。では早く歸つて、婆さんを喜ばせてやりませう。晩に又ゆつくりお茶でも飲みにいraftしやれ。はい左様なら。」

と急いで行つてしまふ。悪兵衛其の後姿を見送りながら、

悪「善兵衛は竈の灰を枯木に撒いて、殿様から澤山に御寶美を戴いたさうな。何の何のそんな事ならわしにだつて出来るサどれ／＼無くならぬ

間に灰を掻き集めて置いて、殿様の御歸りの時  
今一度花を咲かせて、わしもたんまり御寶美を  
いたゞくことにしようかな。うんそうぢや、そ  
うぢや。」

と獨り合點しながら灰を取りに行く。直に灰のは  
入つた箆を持つて出て来る。

悪「幸ひ未だこれだけ灰が残つて居た。もうそろ  
／＼御殿様の御歸りの頃だ。こゝいらでお待ち  
申上げよう。」

と其の時、

家「下に／＼ 下に／＼。」

と殿様の行列が出て来る。悪兵衛は慌てゝ前に進  
み出て、

悪「えゝ申し上げます。申上げます。私は先程の  
花咲爺で御座いますが、今一度花を咲かせて御  
覽に入れ度く、お歸りをお待ち申上げて居りま  
した。」

家「先刻の花咲爺か。では暫らく此處に控え居れ  
と言つて殿様の前に出て禮をしなから、

家「申し上げます。申し上げます。」

殿「何ぢや。」

家「先刻枯木に花を咲かせました花咲爺が、今一  
度花を咲かせて御覽に入れ度いと申して居りま  
す。いかゞ取はからひまするか。」

殿「先刻の爺とな、よい／＼、今一度あの様に見  
事に咲かせて見よ。」

悪「ハハツ あり難き仕合せに存じます。では早  
速。」

ちりんぼりん 黄金さらさら フーッ

ちりんぼりん 黄金さらさら フーッ

なか／＼花が咲かないので悪兵衛少しあわてて、

悪「おや／＼一向に花が咲かない。これはどうし  
た事かな。まだ撒き様が足りないのかも知れぬ。  
今一度。」

と又撒かうとすると、

殿「こらどうした。少しも花が咲かぬではないか。

早くせい。

ちりんぼりん 黄金さらさら フーッ

ちりんぼりん 黄金さらさら フーッ

悪「おや〜 まだ咲かぬ。こんな筈はないが。」

とすつかりあわてて、泣き相になりながら、又ま  
かうとすると、

殿「あいたた。あいたた。」

と急に目をおさへるので、家來は驚いて、

家「これは〜御殿様 如何遊ばしました。」

殿「こらッ 早くあの爺を捕へよ。少しも花が咲  
かぬばかりか余の眼に灰が入つて、痛くて堪

らぬ。きつと偽者にちがひない。早く召し取れ

ッ。」

家「ハハッ」

と急いで悪兵衛の所に來る。其の間中、悪兵衛は

夢中になつて何遍も何遍も ちりんぼりんを繰返  
して居る。

家「こら〜どうした。ちつとも花が咲かないで

はないか。お前は偽者に異ひあるまい。さあ來

ッ。」

と無理に引立て行かうとする。悪兵衛は驚いて、

悪「いゝえ〜 決して偽者では御座いませぬ。

あゝどうして花が咲かないのかなあ。情無いな。

どうぞ今一度撒かして下さいませ。」

とベッコ〜おじぎをする。

家「ならぬ〜。花が咲かぬばかりか 御殿様の

御目に灰を入れた不屈者奴さあ来いさあ来い。」

とドン〜引立てて行く。

悪「どうぞ御かんべん下さい。どうぞ御許し下さ

ッ。もう悪い事は致しません。」

と言ひながら家來に連れられて行く。